

母音の無声化と清濁

江 口 泰 生

(平成三年十月十五日 受理)

Vowel-Devocalization and Sei-daku

Yasuo EGUCHI

一 母音の無声化とカ行タ行の有声化の関係

東北方言と同様に、鹿児島県の南薩地方などでも、語中のカ行タ行が有声化する方言がある。この地域で行われるカ行タ行の語中の有声化現象については、上村孝二氏が「はねる音が前に来るばあい／つまる音が前に来るばあい／無声母音が前に来るばあい／音韻論的に「一」と解釈される二重母音の後部の「二」が前に来るばあい／ミ・ム・ニ・ニュが前に来るばあい」にカ行タ行の語中有声化が生じないとされ(注1)、木部暢子氏が「ライマンの第一法則に該当する複合語／新来の漢語」の場合にもカ行タ行の語中有声化が生じないとされた(注2)。

母音の無声化とカ行タ行の有声化が密接な関係を有している事がわかるが、一般に、母音の無声化といった場合、その対象となる母音には、

a 単語の語末や形態素末尾の狭母音

b 語中の狭母音

の二種が存在する。この二種を区別するかどうかという点には議論がある(注3)、aについては母音の脱落、bについては母音の無声化として区別したほうが良いように思われる(注4)。薩隅方言においては、aは徹底的に行なわれ、同音異義語を生成し、後続の形態素の語形を決定する形態音韻論的側面を有する現象であり(注5)、一方、bは幾つかの条件によって無声化が生じたりしなかったりするが、知覚されることはない音声的現象であるといえる

からである。

南薩方言の話者にとっても、母音の無声化はまったく知覚されていない。ところが、カ行タ行が有声化している事は、明確に把握していると考えられる。例えば、南薩地方の方言調査(注6)において、カ行タ行について、調査者が聞き逃した時、再度尋ねるとはつきりと「濁っているカ」とか「鼻にかかるガ」などと答えるからである。いってみれば、母音の無声化に対しては音韻論的認識が存在していないが、カ行タ行の有声化に対しては音韻論的な弁別を有しているのである。そして、 $\backslash k /$ と $\backslash g /$ と $\backslash g /$ の三項の対立を認識しているのである。

カ行タ行の有声化が母音の無声化と関連しているという指摘はこれまでもなされてきたが、一方が音韻論的認識に關与しているのに対し、一方が音韻論的認識に無関与であって純粹に音声的現象であるのは何故か、という点についてはこれまでは無関心であったように思われる。しかし、よく考えてみると、両者に差があるという事は、非常に不思議な事ではないだろうか。良くいわれるように、カ行タ行の有声化が母音に狭まれて「同化」して生じ、有声化しないカ行タ行と有声化するカ行タ行とが「相補分布」しているものであるならば、更に清濁をひとつの構造としてみた場合に、有声化によってカ行タ行の清濁だけが不均衡をなしているとすれば(注7)、有声化しないカ行タ行と有声化するカ行タ行とは音韻論的にひとつに纏められるだけでなく、普通話し手の意識にのぼらないものではなからうか。

カ行タ行の有声化が音韻レベルに關与した現象である事には、幾つかの理由が考えられる。ひとつは、有声化の生じない他の方言や

中央語との接触が、カ行タ行の有声化を音韻論的に認識させる契機になったのではなからうかという理由である。これは大きな要因であると思うが、外的条件である。従って、ほかに内定条件が考えられなかった場合に考察の対象とする事にして、まず、その方言の内的条件を吟味する必要があるように思う。

そこで、次に考えられる理由として、カ行タ行が有声化する方言においても、語頭のカ行タ行は $\backslash k /$ 対 $\backslash g /$ のような対立を有しているという事である。古い日本語の清濁の対立をどのように捉えるかという問題については色々議論がある(注8)。しかし、この対立を仮に非鼻音対鼻音の対立であったとして捉える事が可能であるとしても、少なくともこの対立の中には、それが余剰的な特徴であるにせよ、有声音対無声音の対立を含んでいる事には間違いない。その故に、当初は音声的レベルでカ行タ行が有声化したとしても、その結果、語中のカ行タ行を鼻にはかからないが「濁っているカ」として捉えられる事の下地はそもそも存在していたと考える事が出来るのではなからうか。 $\backslash k /$ 対 $\backslash g /$ の二項対立の中で、 $\backslash g /$ の認識が行なわれる可能性があるという事なのである。

更に、このような下地に加えて、ここで注目したいのは、まず、前掲のカ行タ行が有声化しない条件には、大きくいって分野の異なる二種類の条件が存在するのではなからうかという事である。その二種類が同列に論じられてきたために、論を不透明にしているように思われる。

その分野の異なる二種類の条件のうち、ひとつは更に二種類に下位分類される。ひとつが、カ行タ行に前接する音が撥音・促音など特殊拍の場合である。現代の、例えば薩隅方言においては撥音・促

音は共に音韻論的独立性が弱いといわれるのであるが、音韻論的に全く独立していない場合、後接するカ行タ行はどのような環境にある事になるのか、そして、時代を遡るとどうであったか、などという点については良く分っていない(注9)ので、ここでは考察の対象とはしない。

もうひとつは、カ行タ行に前接する音が無声母音である場合で、これは音声的な条件として考えて良いように思う。以上は上村氏の指摘にあたるものであるが、これらの条件の時にカ行タ行の有声化が生じないとすると、カ行タ行の有声化は有声化しない場合と「相補分布」をなしている事になる。このような「相補分布」をなしており、有声化が「同化」などの音声的なものであるとすると、下地との関連はともかく、カ行タ行の有声化は音韻論的認識を得難いように思われる。

しかし、更にもうひとつの大きな条件は、前接音とは無関係の場合である。複合語を形成する際の法則、すなわち形態音韻論的分野に属する法則に関する場合と語彙論的事実に関する場合とであって、木部氏の指摘がこれにあたるといえるのではなからうか。つまり、形態音韻論的分野に属する理由と語彙論的事実に関する理由とによって、音声的条件からすると例外にあたる、カ行タ行の有声化が出現している事となる。このような例外が出現する事自体が、カ行タ行の有声化によって生じたカ行タ行の音韻論的確立を示すものといえる。つまり、 p / p' と g / g' の二項対立の中で生じた g / g' の存在が、 p / p' を音韻論的対立の中に組み込み、その結果、このような形態音韻論的分野に属する法則のために生ずる例外や語彙的事実によって生ずる例外を生み出す事となる。これが、先に述べた下地に加

わって、語中のカ行タ行の有声音が音韻論的認識の獲得をより進める契機となり、 p / p' ・ g / g' の対立を生成したと考えるのである。

井上史雄氏は「東北方言の子音体系」(注10)において、有声化が生じない筈の条件の場合にも例外的にカ行の有声化が生ずる用例を挙げて、そこに文法的「類推」や語彙の借用などが働いた結果、無声音であるべきところが有声音になっている場合があるとされる。そして、東北方言を記述するためには、子音の音素目録を例えば p / p' ・ g / g' ・ g / g' のように、三項の音素を必要とするというように論じている。

井上氏の論は東北方言の共時的分析であるが、これを通時的に眺めた場合、「類推」などによって生ずる例外が、語中のカ行タ行の有声化の音韻論的独立を推進した可能性が考えられはしないだろうか。話は遡るが東国資料の疑いのある『元龜本運歩色葉集』・『天正狂言本』などに、カ行タ行の有声化と看做される例が散見したり(注11)、カ行タ行の有声化現象を記述した東国文献が稀に存在する(注12)のは、こうした点で理由のない事ではないのではなからうか。

こうしてみると、語中のカ行タ行の有声音は、そもそも音韻論的認識を得る条件を潜在的に備えているうえに、音声的条件以外の条件によって語中に生じた、「相補分布」しない p / p' と g / g' の対立が二項対立を破棄させ、 p / p' ・ g / g' ・ g / g' の三項対立の音韻論的認識を進めていったと考える事は出来はしないだろうか(注13)。

母音の無声化が全く知覚されないのに対して、カ行タ行の有声化が音韻レベルに関与的である事の背景には、以上述べたような理由

については詳述しない)

このうち、③については、単語の語末や形態素の末尾の i 母音相当の部分にのみ出現する形式である。

①②③の表記が具体的にどのような環境に現われるものかという点については、これから考察していくとして、一般に、母音の無声化といった場合、その対象となる母音は一節であげたように、

a 単語の語末や形態素末尾の狭母音

b 語中の狭母音

の二種が存在する。

ゴンザの資料においては、a の母音の脱落は徹底的に行なわれている。語末や形態素末に狭母音が付いている場合は、例外なく長音相当であるといつてよい(注16)。前掲③は、この a に属する末尾母音が i 相当の場合にのみ用いられている。従って、a の現象を表すのに、③のような表記が行なわれたと考えられる。この点に関しては、とりたてて問題とする点はなく思われるので、ここでは扱わない。

ところが、b については、その条件が一見複雑にみえる事もあるが、一定の見解をみているわけではない。同時に、ゴンザの諸資料にみえる母音の無表記が、すなわち母音の無声化を表記したものである事は、考察を経たうえでなければ出来ない。②の方法についても、どのような場合に用いられるものかといった点からは、これまでも考察がないうえに、硬音符号というロシア語独特の表記の在り方と薩隅方言の表記のなされ方との関係を明らかにするという事は、ゴンザの資料の取扱いのうえでも必要な事であるように思われる。また、母音の無表記に母音の無声化を表す部分があるのならば、前

述したように子音(カ行タ行)の有声化の条件とも関与する問題なので、一度は整理しておくべき問題と思われる。

そこで、『日本語会話入門』に出現する、例えばクヤスヤシに相当する音節を含む総ての単語を網羅して挙げてみると次のようになる。挙例の仕方は前掲のとおりであるが、ロシア語による表記のうち、②のほうを示した。従って、示されていないものは①の表記がなされているものである。

●クに相当する音節を含む単語の場合

A 母音が表記されていない場合

(1)

40 ksa' (草) / 98 ksa (草) / 105 kcu / (くじう) / 10
 6 ksa' d (z). (草で) / 206 ksa' saka (臭が) / 226 ksa' wo
 (草を) / 291 kcu' (くじう) / 304 kcu' (くじう) / 30
 5 kcu (くじう) / 111 i' ktammana (いくたんまな) / 210 ta'
 kse (たくさん) / 211 skno (すくのう) / 231 cu' k (s) on
 (つくしように) /

(2)

8 kmo' (雲) / 11 mira' kmo (むら雲) / 41 kmo (雲) / 33
 3 i' krad (z) em (いくらびと)

(3)

150 jebuk. ra (えぶくろは) ② / 212 m (e) k. ra (めくらは
 ②) / 255 a' k. nesur (商いすね) ② / 258 fulk. re (袋に) ②

B 母音が表記されている場合

- (1)
 3 4 joku (c) mottat (四口もったと) /
 (2)
 7 8 d (z) ekurka (出来るか) / 1 0 1 d (z) e' kur (出来る) /
 1 5 1 ckur (作る) / 1 8 0 takum (巧む) / 2 0 6 ckur (作
 る) / 2 2 4 ckur (作る) / 2 3 1 waku'r (分ける) / 2 6 0
 ckur (作る) / 2 9 6 ckur (作る) / 2 9 9 ckur (作る) / 2
 7 2 ckur (作る) / 2 7 3 ckur (作る) / 3 3 1 niku' m (憎
 む) / 3 5 2 d (z) ekur (出来る) / 9 7 ku'm (汲む) / 9 1
 ku' rma (車)
 (3)
 3 8 kuro' ka (黒か) / 6 0 kuroka (黒か) / 8 8 kuroga' n (e)
 (黒金) 1 2 9 ku' raw (食らう)
 (4)
 0 karaku'i (からくり) / 1 0 6 fadaku' ja (畑作りは) / 2 2
 2 fadak (e) ckuj' ja (畑作りは) / 2 7 2 mado' ckuj' a (窓作りは)
 / 2 7 3 kama' ckuj' a (藁作りは) / 2 9 9 ckuj' itoi (作り取り)
 (5)
 1 2 8 ku' (食う) / 1 4 7 monoku' (物食う) / 8 0 ku' monka
 (食うものか) / 8 0 ku' monka (食うものか) /

● スに相当する音節を含む単語の場合

A 母音が表記されない場合

- (1)
 0 ska' ju (好かれる) / 7 7 u' skaka (薄かか) / 2 1 1 skno
 (少なう) / 2 7 6 aske (あそび) / 2 8 2 aske (あそび)
 / 3 0 5 moskw (i) kai' ra (モスクワから) / 3 0 5 a' ska (あそ
 びは) / 3 0 6 moskw (i) dui (モスクワび) / 3 3 7 jev (an
 g (e) i' st (イエフンゲリスト)
 (2)
 5 7 snofogeta (酔のほげた) / 1 5 4 swa (唇) / 1 7 3 swa'
 (c) (c) or (座うちやる)
 (3)
 1 8 2 wa's. je (c) e (忘れちえ②)

B 母音が表記されている例

- (1)
 1 5 2 su' (c), same (筋さまじ) / 2 1 8 sukd (z) e (鋤ぐ) / 2
 1 8 tasu' kfta (田鋤く人は) / 2 1 8 tasuk (田鋤)
 (2)
 2 8 su' g. kaka (直かか) / 6 0 kilesum, (消え炭) / 1 1 4
 kwagensur (歌弦する) / 1 3 4 (s) go' tsur (仕事する) / 1 4
 4 niwega' sur (匂いがする) / 1 5 9 (s) gotsur (仕事する) /
 1 9 5 awa' sur (圧する) / 1 6 7 sur (する) / 1 8 8 ba'
 nsurfta (番する人は) / 1 8 9 (s) go' tsur (仕事する) / 1 9 1
 (s) indosur (心労する) / 1 9 8 jannesur (やんめする) / 2 0
 9 su' r (する) / 2 1 5 (c) ejo (s) (c) emisur (手様してみする)

- 2 2 2 7 awa' sur (合_わする) / 2 2 4 5 kurasur (較_くする) / 2 2 4
 8 fka' sur (曳_ひかせる) / 2 2 5 5 a' k. nesur (商_あげる) / 2 2 6 8
 kad (z) su' r (鍛_く治_ちする) / 2 2 6 5 surkotga (手_ての_の_の_の_のが) / 3 1 1
 1 suknaka (少_すなか) / 3 1 1 2 judansurna (油_{あぶ}断_たするな) / 3 1 1
 7 su' rna (手_てるな) / 3 2 2 2 (s) go' tsur (仕_し事_じする) / 3 3 3 9
 (s) go' csurfiga (仕_し事_じする日_ひが) / 3 4 8 su' r (す_する) / 1 5 5
 misur (見_みせる) / 8 3 su' zmja (雀_{すず}は)
 (3)
 3 6 0 suzui (硯_{すずい}) / 4 7 su' wa (酢_すわ) / 3 6 0 sumja (墨_{すみ}は)
 (4)
 2 1 7 su' jon' (物_{もの}様_{さま}に) / 3 1 0 sujod (z) e (物_{もの}様_{さま}) / 3 1 1
 sujo (物_{もの}様_{さま}) / 3 7 5 sujo (物_{もの}様_{さま})
 (5)
 2 9 8 osu (遅_おす)

●シに相当する音節を含む単語の場合

A 母音が表記されない場合

- (1)
 0 omo' (s) tu (s) (c), (面_{おも}白_{しろ}い) / 6 0 cum (e) to (s) (c),
 (冷_{ひや}たいし) / 1 4 7 (s) ta' (t) / 1 5 5 agno (s) tawo (類
 のトキ) / 1 6 8 mune' n (s) ta (胸_{むね}のト) / 1 6 8 wa' k, no (s)
 ta (脇_{わき}のト) / 1 7 0 katafara' n (s) ta (片_{かた}腹_{はら}のト) / 1 7 1
 wakno (s) ta' joi (脇_{わき}のトキ) / 1 7 2 (s) ta' (t) / 1 6 1
 (s) (c) e' kara (く_くら) / 2 3 0 samu' (s) (c) (寒_{さむ}い) /

- 2 1 5 (c) eio (s) (c) emisur (手_て様_{さま}し_しみ_みする) / 2 6 1 (s) ta'
 n (トの) / 2 6 7 (s) ta (c) ee (仕_し立_た屋_やに) / 3 2 5 (s) ta' nfta
 (トの人) / 3 3 3 a' r (s) ko (お_おの_の人_{ひと}) / 0 omo' (s) tu (s)
 (c) (面_{おも}白_{しろ}い) / 1 4 mi (s) keka (短_たか) / 3 1 fto' c (s)
 koka (1 1 1 1 1 1 1 1) / 1 6 3 so' (s) (c), (ま_まじ) / 1 8 8 saka
 (s) kai'ta (賢_さし_しか_か人は) / 1 6 7 saka' (s) kat (賢_さし_しか_かと) / 2
 2 7 so' (s) (c) e (ま_まじ) / 2 8 8 a' (s) ta (明_あ日_ひ) / 2 6 4
 na (s) ke (ま_まじ) / 2 6 9 na' (s) ke (ま_まじ) / 2 6 8
 na' (s) ke (ま_まじ) / 3 1 4 miguru (s) ka (見_み苦_くし_しか) / 3 5
 7 so' (s) (c), (ま_まじ) / 2 7 8 kata' (s) k (e) ne (か_かた_たし_しけ_け
 い) / 3 2 na' rk (e) k (s) tat (丸_{まる}くしたと) / 3 5 miguru' (s)
 ka (見_み苦_くし_しか) / 5 6 jawara' (s) ka (や_やわ_わら_らし_しか) / 5 7
 jawara' (s) ka (や_やわ_わら_らし_しか) / 7 1 m (e) dzra (s) ka (珍_{めづ}し_しか)
 / 8 0 nama' (s) ka (生_なま)

(2)

- 1 3 4 (s) gfo' tsur (仕_し事_じする) / 1 5 8 (s) gotsur (仕_し事_じする)
 / 1 6 1 (s) mau (仕_し舞_まう) / 1 6 1 (s) go' t (仕_し事) / 1 8 9
 (s) go' tsur (仕_し事_じする) / 3 0 9 (s) got (s) ce (仕_し事_じい) / 3
 1 0 (s) got (s) ce (仕_し事_じい) / 3 2 2 (s) go' tsur (仕_し事_じする)
 / 3 3 8 (s) go' csurfiga (仕_し事_じする日_ひが) / 0 uje' (s) saru (嬉_うじ
 がう) / 1 8 8 fo' (s) gar (欲_ほしが_がる) / 1 8 8 uje' (s) gar (嬉_う
 しが_がる) / 1 6 4 fo (s) gar (欲_ほしが_がる) / 1 6 6 fo (s) gar (欲_ほ
 しが_がる) / 2 5 9 fo (s) gar (欲_ほしが_がる) / 2 5 7 otoro' (s) gar
 (現_{いま}しが_がる) / 3 0 6 (s) got (s) ce (仕_し事_じい) / 3 3 0 fo (s)
 gaija' ran (欲_ほしが_がりや_らん)

(3)
 37 (s) to'ka (白か) / 129 (s) tamja (しらみは) / 32 fa
 (s) ta (柱) / 74 ono' (s) toka (面白か) / 373 ka' (s) ta
 (頭)

B 母音が表記される場合

(1)

290 (s) i (c) (c) ojaraka (知っちよいやるか) / 291 (s) i
 (c) (c) or (知っちやる) / 307 (s) i (c) (c) e (知って) / 3
 32 (s) i (c) (c) ojaraka (知っちよいやるか)

(2)

246 fa (s) i' r (走る)

(3)

0 saka (s) i' ka (賢しか) / 0 (s) i (s) o' ta (c) (師匠達) / 2
 80 saka (s) i' ka (賢しか) / 349 (s) i (s) osame (師匠さま
 に) / 367 (s) i' (s) o (師匠) / 375 (s) i (s) owa (師匠
 は) / 0 saka (s) i' ka (賢しか) / 280 saka (s) i' ka (賢し
 か)

以上を通覧すると、まず②の方法—即ち「子音+硬音符号」とい
 う表記は、子音の部分がほぼク(後掲の表によってス・グ・ツ・
 プ)に限られ、かつ後続音がラ行ないしヤ行(後掲の表によって稀
 にナ行)に限って出現している事がわかる。しかし、同様の条件に
 あっても、必ず「子音+硬音符号」という表記がなされるかという
 と、必ずしもそうではなく、例えばB—(3)のように、後続音が

ラ行であっても「子音+母音+ラ行(ヤ行)」という表記も出現す
 る。つまり、このような環境にある場合、母音が表記される場合と
 されない場合とがあつて、されない場合には硬音符号が施される用
 例が多いという事なのである。稀に「211 skno (少う)」「57
 6 s. kno (少う)」「311 sukakaka (少なかか)」というように、
 同じ音節が「子音」のみ、「子音+硬音符号」、「子音+母音」とい
 うような表記のなされ方をする場合があるが、珍しい。

硬音符号は固有の音価があるわけではなく、「子音字とя、e、
 ю、.eとの間にこの字が書かれているときは、я、e、ю、.eが子
 字音字と分離して発音されることをしめ」(注16) ものである。
 従つて、ロシア語の表記法を踏襲して、「子音+母音+ラ行(ヤ
 行)」とは異なつた、後続音と分離した音であることを殊更に示す
 ための表記であると考えざるをえない(具体的発音については四節
 参照)。ゴンザの諸資料には全体にこのような硬音符号の用い方が
 見られるのであるが、このようにロシア語の表記に抵触しないよう
 な表記が用いられるということは、むしろロシア語の表記法に極め
 て敏感なものの手になる事を示すものと思われる。

さて、母音が表記される場合とされない場合とは、その条件に
 どのような違いがあるのであろうか。

まず、B—(1)(2) によつて、当該音の母音が表記される場
 合、後続音が「r/(c)」などの単独の子音音節であるといえる。逆
 に、他の全ての音節の場合を観察しても、後続音が単独の「子音」
 音節であれば、必ず当該音の母音が表記される。「523 faralkr.
 ɔɔ (腹ふくる事)」は母音が表記されない音節が連続していて例外
 のように思われるが、アッシュ本でこの箇所を確認すると「faralkr.

「r. kol」となっていて、例外とはいえない。B—(1)は後続音が無声音、B—(2)は有声音であるが、それらの違いを問わず、後続音が単独の子音音節であれば、当該音に母音の無表記は生じないという事は、はっきりとした条件として考えて良いように思われる。

これに対し、A—(1)・A—(2)は後続音が「子音+母音」の音節を形成していて例外はない。但し、後続音が「子音+母音」であれば、必ず当該音の母音が表記されないかというところではなく、B—(3)のように後続音が「子音+母音」でありながら、当該音の母音が表記されているものもある。しかし、B—(3)のような用例は、後続音が有声音である場合が多い。つまり、当該者の母音が表記されない用例は、後続音が「子音+母音」の構成をなしている無声音の場合に多く、同じ構成をなしている有声音の場合には少ないという事になる。

また、後続音が「母音」単独音節(B—(4))である場合には、常に当該音の母音が表記されていて例外はない。「24. 杖」という例があるが、これは「硬音符号」が施されており、例外とはいえない。

更に、これは当然の事であるが、当該者が長音相当である場合(B—(5))にも、常に当該音節の母音が表記されている。

以上をまとめてみると、後続音が「子音」単独音節である場合や「母音」単独音節である場合、当該音の母音は必ず表記されるのに対し、後続音が「子音+母音」である場合、当該音の母音は表記されたり、されなかつたりするという事になる。そして、後続音の「子音+母音」の子音部分が無声音である場合、多く当該音の母音

は表記されず、有声音である場合、無声音である場合と比較して低い割合で母音の表記がなされないという傾向を認める事が出来る。

それでは、後続音が「子音(有声音)+母音」である場合、どのような条件のときに当該音の母音が表記され、どのような条件のときに当該音節の母音が表記されないであろうか。

A—(2)とB—(2)・(3)とを比較してみると、当該音に母音が表記される場合、その音節にアクセント記号がおかれることが非常に多いという事実を指摘できる。『日本語会話入門』においては、多くのアクセント符号が記されているが、そのアクセント符号が当該音におかれている場合、多く当該音は母音が表記される。逆に当該音に母音が表記されない場合、そこにアクセント符号が施されたものはない。

母音の表記の有無は、『日本語会話入門』において、概略以上のような状態を呈している。ロシア語の表記の方法に抵触しないように配慮された部分もあるが、後続者が「子音+母音」か「子音」単独音節か、或いは後続音が有声音であるか無声音であるか、或いはアクセント記号があるかどうか、などの条件によって、当該音の母音が表記されたりされなかつたりするのである。このような状態をみてみるときに想起されるのが、日本語における母音の無声化という現象ではなからうか。

三 薩隅方言の母音の無声化

『言語学大辞典』(注18)によれば母音の無声化は、「標準語の狭母音素 / ʌ / と / ɛ / は、無声音の子音音素には含まれたとき、規則

的に無声化する。……あるいはまた、(b) これらの無声の子音素に先行された \backslash / \cdot / E / が、つまる音 b / によって後続される音節がつづく場合である(例省略)。ただし、bの場合には、つまる音を含む音節にその単語のアクセント核があるときには、そのせま母音は無声化されないで発音されることがある(省略)。また、無声子音素には含まれたせま母音素が2個連続する場合には、2番目のせま母音素は無声化されない傾向がある。3個以上つづく場合には、ひとつおきに偶数個目のせま母音素が無声化されない傾向がある(例省略)。また、無声の子音素に先だたれた \backslash / \cdot / E / が単語のおわりにきて、単語のアクセント核がそれより前の音節にあり、かつ、その単語のあとに休止がある場合、そして、その単語が普通のイントネーションをもって発話される場合には、そのような短いせま母音素は、その直前のせま母音素が無声化されていないかぎり、無声化されて発音されることがある(略)という。つまり、標準語においては、後続音が無声音である、無声化した音節が連続しない、アクセント核がおかれない、などの条件によってその音節の母音が無声化するのである。

更に、九州地方の方言においては、前田勇氏が「母音無声化の原因に就て」(注19)において述べられた例のうち、語末・形態素末の狭母音の脱落(aの場合)の例を除外すると、①無声音 \backslash / E / + 無声音 \backslash / E / \cdot ③無声音 \backslash / E / + 有声音 \backslash / E / \cdot ④無声音 \backslash / E / + 有声音 \backslash / E / \cdot ⑤有声音 \backslash / E / + 無声音 \backslash / E / \cdot ⑥有声音 \backslash / E / + 無声音 \backslash / E / \cdot ⑦有声音 \backslash / E / +

有声音 \backslash / E / などは「 \backslash / E / が無声化する事もある」という事になる。

糸井寛一氏は「大分県長湯方言」(注20)の母音の無声化について、「一般に無声子音素には含まれた b / に該当する母音は無声化しやすい。特に後の音節の母音が E / E / O / であれば、必ず無声化する。……(以下省略)……」(九州方言の基礎的研究)とされ、野林正路氏は「熊本県深海方言」(注21)の母音の無声化について、「(1) この方言のイ列音・ウ列音の母音は、その直後に a / e / o / を含む音節(その子音が無声)が来ると、無声化する。……(例省略)……(2) 直後の a / e / o / を含む音節が有声音に始まるものであるときも、無声子音で始まるイ列音・ウ列音の音節は、その母音が短縮する傾きがある。……(例省略)……(3) 有声音に始まるイ列音・ウ列音の母音も、直後に E / E / O / を含む音節(その子音が無声でも有声でも)が来ると、短縮する傾向がある。……(例省略)……」とされた。

つまり、九州地方の方言における母音の無声化は、無声子音に挟まれた狭母音はもちろんのこと、後続音が有声音であっても無声化する可能性を有するのである。そして三者は述べられていないが、『言語学大辞典』によればアクセント核が関与する可能性があるのである。

このような状況と、前述した『日本語会話入門』における母音の無表記とは、大変、良く対応した状況を呈しているといつて良いのではなからうか。

『日本語会話入門』における母音の無表記と、現代九州方言における母音の無声化とが良く対応した状況を呈しているという事が認

められるならば、『日本語会話入門』における母音の無表記は、全てがそうではないにしろ（四節参照）、一八世紀初頭の薩隅方言の母音の無声化の状況を反映していると考えることが出来るのではなからうか。

国語史において、母音の無声化は日本人自身には知覚されにくい事もあって、これまで主に外国資料から断片的に報告されてきたに過ぎない（注22）。しかし、それらはいずれも纏まった記述をなすにはあまりに情報が少な過ぎたといえる。また、現代語の薩隅方言において、母音の無声化について調査したのものもあるが、必ずしも十分な記述に耐え得るだけの資料を収集してなされたものとは言い難い。特に薩隅方言の場合、形態変化が激しいために、その条件を十分に記述していかないように思われる。

ところが、ゴンザの諸資料はおそらくロシア語の担い手によって表記された蓋然性が極めて高く（注23）、従ってロシア語のフィルターを通してものであるが、日本人には知覚する事の出来ない、母音の無声化を把握し、それを表記に反映させた可能性は十分に考えられる事である。しかも、ゴンザの諸資料にはこのような精密な観察による表記が多くの単語になされ、質と量とを兼ね具えた外国資料を形成しているのである。ロシア語の表記の在り方やそこから得られた情報の処理を誤らなければ、薩隅方言資料として十分に耐えられるものと思われる。

そこで、ゴンザの諸資料から『日本語会話入門』・『新スラブ・日本語辞典』における母音の無表記を後続音などの観点からまとめたものが、後掲の表I-IVである。特に用例を必要とするものは表に示し、次節において説明を加える事にした。後続音の欄に星印を

施したものは無声化したりしなかったりする場合である。また、ロシア語の転写方法は村山七郎氏『漂流民の言語』に従うが、軟音符号や硬音符号の表記については前節で示した方法によった。

表を通覧していえば、母音が無声化する場合の条件としては、後続音が「子音（無声音）+母音（a/u/e/o）」である場合である。無声化しない場合の条件としては、後続音が「子音のみ」或いは「母音のみ（リから転化したj/ニから転化したi）」であったり、当該音節にアクセント核がある場合である。また、無声化したりしなかったりする場合としては、後続音が「子音（有声音）+母音」の場合である。しかし、これも用例を通覧すると、当該音よりも前にアクセント核が存在する場合無声化が生ずる（次例）。

3 3 3 i: kra (幾ら)、2 5 5 a'k nesur (商いする)、5 6 4 nu sda (盗人は)、1 8 3 fojgarar (欲しがらる)、5 1 1 a'jgara (足軽は)、9 1 ku'rma (車)、1 0 7 bo'bra (ポーブラ)

（以上、『日本語会話入門』）

1 7 7 / 2 2 1 m. y. y. y. (少なか)、8 5 / 2 7 9 / 3 0 2 / 4 3 0 / m. y. y. y. (温むる)、9 9 m. y. m. y. (小娘)、9 9 / 1 0 3 a. m. y. (娘)、1 3 3 n. y. m. y. (母)、1 7 2 y. y. y. (狐)、3 6 m. y. y. (小髭)、1 6 2 m. y. y. (小舟)、1 6 0 / 3 5 9 m. y. m. y. (車)、1 5 1 / 2 5 8 m. y. y. (小溝)

（以上、『新スラブ・日本語辞典』。番号は活字本のページ数。以下、同じ）

また、当該者よりも後にアクセント核が存在する場合、無声化が生じない傾向が顕著である。

482 kika:r (聞かる) 151 kimo'wa (肝は) 0 jifota:c
(師匠達) 46 fukusu:r (奉公する) 168 mune'nsja (胸の
下) 556 muzo'gac (無慙がって) 560 buge'nsja (分限者)
(以上、『日本語会話入門』)

83ヤノロ(茸) 161ヰンヤ(芝居屋) 133ヰンヤ(絞
る) 185ヰンヤ(霜) 55ヰンヤ(奉行) 31/139ヰンヤ
ヰンヤ(分限者) 171ヰンヤ(具足) 170ヰンヤ(燕)
150/31ヰンヤ(強者)
(以上、『新スラブ・日本語辞典』)

また、後続音が「子音+母音*i*」の場合も多く無声化が生じない。
「語末母音*i*+助詞「は」・「語末母音*i*+助詞「に」」から転化
した*i*」の場合も大体無声化が生じないが、これらには/ゝ/が生
じているので、後続者が「子音+*i*」の場合に準じて良いかもしれ
ない。

このように纏める事が出来るとすれば、薩隅方言の母音の無声化
は、後続音が「子音(無声音)+a/u/e/o」の場合に無声化が生
じ、後続音が「子音のみ」・「子音+母音*i*」・当該音にアクセシ
ト核がある場合には無声化が生じない。また、後続音が有声音の場
合、アクセシト核が当該音より前の場合には無声化が生じやすく、
後の場合には無声化が生じにくい傾向があるといえるのではなから
うか。

こうしてみると、薩隅方言における母音の無声化が生ずる原因は、
「きこえ(sonority)」に求められるように思う。後続者が子音単
独音節で「きこえ」が小さい場合、それを支えるために母音の無声

化は生じないのではなからうか。また、アクセシト核がある場合に
母音の無声化が生じないのも「きこえ」が大きいからではなからう
か。

四 個々の用例の解釈

『新スラブ・日本語辞典』の場合、アクセシト記号が一部にしか
施されていないので、用例の解釈にはやや不都合である。従って、
以下、『日本語会話入門』の例外的にみえる用例を解釈していく事
によって前節の結論を追証してみたい。

● *kn* の場合

「*r*+子音」が後続音の場合、「150 jeduk:ra 212 e(ə)
ra 258 tuk:re」のように、「*k*+硬音符号+*r*行」という表
記が用いられる場合がある。このように硬音符号が用いられるのは、
後に*r*行・*j*行・母音の音節が後続した場合で当該音節がク・ス・
グ・ツ・ブの場合に限られる。

日本語において、「母音が無声化した音節に現われた *p, t, k* /
はすべて強い気音を有する」といわれている(注25)。つまり、「子
音+硬音符号」の用いられるのは、子音の部分がク・ス・グ・ツ・
ブにほぼ限られる事と併せて考えてみると、やはり母音の無声化を
表そうとしたものであるが、これらは非常に強い気音を伴うため
「息のとぎれ」を示す「子音+硬音符号」で表記したものと考える
が、いかがであろう。

ところが一例だけ例外があつて、活字版「479 fa:k(s)owo
(百姓は)」のように後続音が「(s)」でありながら、「*k*+硬音符

号」が用いられている例がある。しかし、この部分をアッシュェ本で確認すると「tak. (s) o」のように軟音符号になっており、形態素末の狭母音の脱落を表記したものだと言える。

● i: の場合

後続音が「子音+母音」の場合、無声化するのであるが、「270 tkir (ふき切る)」の場合、無声化していない。これはこの位置が形態素末であると考えられる。「255 a. k nesur (商いする)」は、「商い」の「k」に硬音符号が付けられているが、ここも強い気音を有していたと考えられる。

「機嫌」については、「596 ki. gentojai」のような例もあるので、アクセント核があったため、無声化しなかったのかもしれない。

「403 takakjai (叩きゃい)」や前項に属する「598 saba' k'jai (やほつきゃい)」は、一見無声化と関係ある表記に見えるが、「takai+kjai」・「sabaki+kjai」からこのような形へ変化したのではなく、「takai+jai」から、所謂「連声」のような現象を経て変化したものであって、ここで取扱う無声化の現象とは別個のものと考えたほうが良いように思う。

● su の場合

「396 mono (s) jia (物知りは)」……「(s) i:」という表記からは「シリ」√「シイ」という変化があった事が伺える。「ものし」という単語に「は」が接続したのであれば、「mono (s) ja」となる筈である(注24)。「397 fo. (s) jia (星知りは)」……これも同様に「シリ」√「シイ」という変化があったと思われる。

「211 skno (少う)」は後続音が単独の「k」でありながら無

声化しているが、これが表記の揺れであることは前に述べた。

また、「337 jev (an) a (e) i: st」は、後続音が「t」でありながら無声化しているが、これはロシア語を表記したものであるという点に例外となる理由があるかもしれない。

● (s) i: の場合

「0 omoi (s) tu (s) (c). (面白うしゅ)」・「32 ta' (s) ta (柱)」・「373 ka' (s) ta (頭)」・「37 (s) to' ka (白か)」・「129 (s) tanja (しらみは)」・「530 (s) ta' d (z) ana (知られな)」・「560 (s) tajet (知らいえと)」・「586 (s) tantta (知らん人は)」・「586 (s) ta' jen (知らいえん)」・「597 (s) ta' ntowo (知らん人を)」のように、「(s) i:」は「ラから転化したタ」を後続音とする場合においても無声化する。

後続音が「有声音+母音」の場合、無声化したりしなかったりするのが普通であるから、もし後続音が「ラ」のままであったならば、この場合のシの母音の無声化は生じなかったと思われる。事実、「日本語会話入門」においては、「37 (s) toka (白か)」の場合には無声化しているが、「37 (s) iracua (白土は)」・「469 (s) rowa (城は)」・「502 (s) ire (城に)」の場合、無声化していない。逆に、シの無声化が「ラからタ」への転化を促したともいえそうであるが、この前後関係については今のところ良く分らない。薩隅方言においては、語頭のラ行はタ行に転じ、語中のリ・レは／＼へ転じるなど、母音の無声化とは無関係にラ行そのものが不安定な環境にある事も考慮に入れる必要があるように思うからである。

「(s) i: (s) o (師匠)」の場合、「(s) i: (s) o」・「(s) i: (s) ota」

〔c〕の両様がある。前者はアクセント核があるから無声化しなかったといえるが、後者はアクセント核が「達」にあり、当該音よりも後にアクセント核があるので無声化したのではなからうか。

「soi(s) (c). (そしち……「ち」は助詞)」の場合、「ち」は全て「(c) + 硬音符号」で表記される。この場合に限って、後続音が単独の子音音節でありながら、「(s)」が無声化している。但し、この場合、「p (c) (p) (c)」と転写している文字「」は、ロシア語自体において、どのような場合でも常にイの音色を伴って発音されるものである(注26)。こうしてみると、この場合に限って、後続音が「(c)」でありながら、「(s)」が無声化しているようにみえるのは、薩隅方言における例外というよりもロシア語の表記の問題が絡んでいるのではなからうか。

● fi の場合

「508 fje'rkja (笛吹き)」は「語末母音 i + 助詞は」でありながら、無声化している。これについては良く判らない。

● fi の場合

この場合、無声化すると「fi」となって「f(フ)」の場合と区別がつかなくなる。例えば、『新スラブ・日本語辞典』においては、「フンダイン(左の) ~ フ。ダンキメ(左さまに)」という例がある。

『日本語会話入門』に「fi」の音節が出現するのは大体、無声化しない環境においてである。「10 fikw (i) (低い) / 155 fige-wa (髭は) / 157 fige'na (s) (髭なし) / 160 fida'ino (左の) / 194 fida'r'kat (ひだるかた) / 204 fida'ruwa (ひだるうは) / 368 fizika (フジカ) / 427 owa'fige (おわ髭) /

437 fibo'd (z) a (紐じゃ) / 534 fida'rkata (ひだるかた) は「」などは、後続音が有音であるものが多く、従って無声化しない。

『新スラブ・日本語辞典』には「フ。ヤ(髭) / フ。ヤン(左) / フ。クメシ。(低くする)」などの無声化した用例を指摘出来るが、『日本語会話入門』にはみられない。「fi」が無声化する条件は「fi」の場合に準じて良いように思われる。

● mu の場合

「45 mma'ka (旨か) / 147 mma'saka (旨さか) / 245 mman (馬の) / 320 mmajeta (生れたとは) / 321 mma'jckja (生れ付きは) / 619 mma'ka (旨か)」は無声化というよりも、鼻音を後接する語頭の「ウ」の音価の問題と思われる。

● bi の場合

「272 bido'rod (z) e (ジードロで)」の場合、第一音節が長音相当であった可能性もある。従って、後続音が「子音 + 母音」であっても無声化しなかった可能性がある。単独でも「42 bi: doro」のように第一音節にアクセント核があり、無声化しない。

● bu の場合

r行が後続する場合には硬音符号を伴って母音が無表記される事が多いのであるが、ここでは、「170 bo'bra (ポーブラ)」のような語形で出現している。この理由については良く判らないが、或いは外来語起源の単語であることが関係しているかもしれない。

以上、一見、例外と思われるものも、個々にみればそれぞれの理由があるようで、こうした用例を除外すれば、一八世紀初頭の薩隅方言における母音の無声化は、前節で述べたような条件のもとに生じているといえるのではなからうか。

五 現代九州方言との関係と国語史的意味

これまで述べてきたように、ゴンザの諸資料にみられる母音の無声化は一部を除けば、母音の無声化を反映したものであらうと思われる。それではそれが三節で示したような条件のもとに生ずるといふことは、どのような意味を有するのであらうか。

まず、第一点として既に前田氏・糸井氏・野林氏が指摘しておられる、薩隅方言に隣接する方言における母音の無声化と非常に共通点が多いという事実である。母音の無声化という点に限っていえば、前田氏・糸井氏・野林氏の指摘された方言の延長線上にある方言であるといつて良いのではなからうか。

また薩隅方言においては、音声的レベルの話になるが、本稿で指摘したように、母音の無声化が連続しないという事や、語末の狭母音の脱落とも連続しないという事がある。形態音韻論的レベルでいうならば、かつて論じた事があるが(注27)、助詞の「の」が薩隅方言においては撥音化して「ン」になることがある。しかし、これも母音が脱落して声門閉鎖音化している単語や一拍の単語に下接するときは「ノ」の形が保たれるが、語末に母音がある場合には撥音化して「ン」の形になる。

或いは、これも形態音韻論的レベルの問題であるが(注28)、助詞「に」が単語に下接する時も、普通は「イ」(ノ)に転ずるのであるが、一拍の単語に下接する場合や撥音で終止する単語や「リ」から転じた「イ」(ノ)や融合している二重母音などを語末に有する単語に下接する場合には、「イ」(ノ)に転ずる

事なく、「二」の語形を保ったままである。

薩隅方言において、助詞「に」・「の」や狭母音を含む音節は、常に子音単独音節に転ずる可能性を有しているといえる。しかし、これらの現象から、子音単独で構成される音節は互に音節を連続させないという、消極的ではあるが一種の法則性を見出す事が出来はしないだらうか。その規則にそつて、音声現象や音韻現象や形態音韻論的現象がおこなわれているものと考える事が出来はしないだらうか。

薩隅方言は所謂「シラビーム方言」とされ、ノ、ン、ヤ、ヅ、などで終止する音節の存在が指摘されてきたが、それらの音節がどのように連なるかという観点からの報告はあまりみあたらないように思う。しかし、ここで述べてきたような音節連続の在り方からすると、むやみに子音のみが連続していく事はなく、CVを基本として、CVに接する場合に限つてCのみの音節が生じる事があるという事になるかもしれない。この点、やはり日本語としての特徴を持つているといつてよからうと思う。

次に、冒頭で述べた鹿児島県の薩摩半島南部に行なわれているカ行タ行の語中有声化現象との関係である。

現在の穎娃町鶴成方言や開聞町脇浦方言の調査(注29)のなかから、カ行タ行の語中の有声化に関して、母音の無声化によって有声化しない用例と、母音の無声化が生じていないがゆえに有声化が生じている例をそれぞれあげてみる。

母音の無声化が生じているために後続のカ行タ行が有声化しない単語

額 ([cite' ぶとか ([Φ utokai])、舌 ([jita])、肱 ([suto])、
はぎ ([suto])、深々 ([Φ ukakai])、光 ([cikai])、明日 ([asji-
ta])

母音の無声化が生じていないために後続の力行タ行が有声化する単語

肩 ([kada])、乳 ([tjidz i])、背中 ([jenaga])、腕 ([gode])、か
かと ([adodz i])、父 ([todo])、母 ([kaga])、弟 ([odo 2])、い
とこ ([idogo])、婿 ([mugodon])、中 ([naga])、箱 ([hago])、
竹 ([taze])、墓 ([haga])、綿 ([wada])、裸 ([hadaga])、枕
([magura])、畑 ([hadage])、男 ([odogo])、砂糖 ([sado])、跡
([ado])、型 ([kada])、言葉 ([kodoba])、あぐび ([agu 2])、
垢 ([aga])、旗 ([hada])、池 ([ige])、

興味深いのは、「乳」において、母音の無声化が生じていないた
めに有声化が生じているという現象である。ゴンザの資料において
も、「乳チチ」は第二拍目のチの母音は脱落しておらず、従って i
母音を有する後続音を伴うので第一拍目のチも無声化していない。

また、母音の無声化の現われ方をみると、これまで述べてきたゴ
ンザの諸資料における母音の無声化の現われ方と非常に良く対応す
るといってよいのではなからうか。用例数が必ずしも充分ではなく、
アクセントとの関係・後続音との関係が必ずしも明瞭とはいえない
かもしれないが、少なくとも、後続音が「無声子音+母音」の場合
で、かつその母音が i 以外の場合に無声化が生じているのである。

このような点からすると、この地域にも、ゴンザの諸資料にみら
れるような条件による母音の無声化が行なわれていたのではなから
うか。この点、現代方言の調査報告に待たねばならないが、もしこ
のような事が認められるならば、南薩方言における語中の力行タ行
の有声化は、それよりも広い範囲に分布する、前述の条件によって
生ずる母音の無声化という現象の内側に分布する現象といえる。そ
して、その母音の無声化に規定されて、力行タ行の有声化が生じて
いるのである。このような分布の面からみるならば、力行タ行の有
声化は母音の無声化よりも後に生じたもののように思われる。

逆に母音の無声化によって、元来有声音であった力行タ行が、母
音の無声化によって清音化したとは考え難いように思われる。母音
の無声化によって、元来有声音であった力行タ行が清音化したとす
るためには、例えば「旗 ([hada] > [hata])」のような変化が生じ
なければならぬが、このような変化を起こさせる原因が母音の無
声化であったとするには、薩隅方言の母音の無声化の在り方があま
りに異なり過ぎるように思われるからである(注30)。

譲って、仮に語中の力行タ行が有声音であるのが古い姿であった
としても、それが無声音に転換するためには、母音の無声化とは別
の角度からの説明が必要とされるように思われる。例えば古く南薩
方言のような清濁の対立の在り方が元来の形で、同時に母音の無声
化も極めて活発であった。但し、語中における有声音対無声音の対
立は「中和」の関係にあり、清濁には「非関与的」であった。その
後、鼻音の衰退に伴い、清濁の対立が有声対無声の対立に転換し、
南薩方言の周辺地域のようになった、更に中央語においては母音の
無声化すらも衰退した、など(注31)。しかし、これは日本語の清

濁のシステムに關与する問題であつて、母音の無声化と直接關与しないのではないかと思われる事は冒頭で述べたとおりである。

日本語の清濁の対立がどのような史的变化遷を辿ったかという問題は解決されたわけではなく、今後に残されているわけであるが、少なくとも薩隅方言の母音の無声化の在り方からして、音声レベルの母音の無声化現象が清濁の対立そのものに直接に關与しているとは考え難いように思われる。

記述に終始した感があるが、本稿が薩隅方言の母音の無声化の記述や清濁の捉え方・ゴンザの諸資料の研究などに寄与する点があれば幸いである。

注

- 注1 上村孝二氏「上甕島瀬上方言の研究」(鹿児島大学法文学部紀要 文学科論集) 第一号 昭和四〇年一月)
- 注2 木部暢子氏「鹿児島県姪娃町方言の語中有声化について」(国語国文 薩摩路) 第三四号 平成二年三月)
- 注3 『音声学大辞典』の「無声化」の項目参照
- 注4 『言語学大辞典』において両者は区別されていないが、前田勇氏「母音無声の原因に就て」(『音声学会会報』八〇号(昭和二七年一月))において、特に九州方言においては両者を区別すべき事を論じている。従いたく思う。旧稿「形態音韻論的観点からみた一八世紀初頭の薩隅方言―助詞「の」の撥音化について―」においては、語末・形態素末の狭母音の脱落を「無声化」としたが、これを機に改めたい
- 注5 注4引用の拙稿など
- 注6 平成二年一月実施。崎村弘文氏・木部暢子氏との共同による南薩方言の調査
- 注7 服部四郎氏『言語学の方法』二八三頁以下(昭和四八年三月九刷による。岩波書店)
- 注8 現代語のように有声音対無声音の対立として捉えるのではなく、鼻音対非鼻音として捉える在り方も無視出来ないように思われる
- 注9 迫野虔徳氏は「促音・撥音の表記の動揺―『天正狂言本』の場合―」(『文学研究』第八四輯 昭和六二年二月)において、地方によっては促音と撥音の音韻論的独立の時期に違いがあったのではないかという疑いを提出されておられる
- 注10 井上史雄氏「東北方言の子音体系」(『言語研究』五二号 昭和四三年)
- 注11 迫野虔徳氏「京大図書館蔵元龜二年本運歩色葉集」について(『国語国文』第四二巻第七号 昭和四八年七月)、同氏「中濁」考(『文学研究』第八八輯 平成三年三月)など
- 注12 『莊内方言』や『獄中記』(『民衆運動の思想』昭和四五年七月 日本思想大系五八 岩波書店)など
- 注13 この事情は東北方言においても同様であつて、井上史雄氏が「ノ・／＼／＼・／＼」という三項の音韻論的対立の根拠とされたのが「類推」による語中のカ行タ行の有声音の出現なのである
- 注14 薩隅方言の母音の無声化については、上村孝二氏が「鹿児島県薩摩郡高城村」において、「(i) 無声子音と無声子音との間に挟まれる場合(……省略……) (ii) 語末の場合(……省略……) (iii) 無声子音と有声音との間に挟まれる場合(……省略……) (iv) 有声音と有声音との間に挟まれる場合(……省略……) (v) 有声音と有声音との間に挟まれる場合(……省略……)」(国立国語研究所『日本方言の記述的研究』明治書院 昭和三四年十一月)とされた。木部暢子氏は「鹿児島および東北方言の語中カ行タ行の子音について」(『語文研究』第七十号 平成二年一月)において、「無声音の子音音素にはさまれた狭母音」が無声化するのではなく、「キ・ク・シ・ス・チ・ツにおける狭母音が後ろの子音に關係なく」無声化するのであるとされた
- 注15 本稿では主に『日本語会話入門』・『新スラブ・日本語辞典』を対象とする。前者は『漂流民の言語』(昭和四〇年三月 村山七郎氏 吉川弘文館)、後者は『新スラブ・日本語辞典 日本版』(昭和六〇年五月 村山七郎編 ナウカ書店)による。また、原本のコピーによって表記を確認した

- 注16 一通り調査したところでは、例外と思われるものに「チチ(乳)」という例があつて、語末が狭母音であるにも関わらず、母音の脱落が生じていない(『新スラブ・日本語辞典』)。面白い事に現代の南薩方言においても「チチ(乳)」の語末母音は脱落しておらず、しかも、二音節目の「チ」が有声化している
- 注17 佐藤純一氏『初歩のロシア語』(昭和六三年二月二九版 昇龍堂出版)による
- 注18 『言語学大辞典』第二巻一七〇三頁「母音の無声化」の項目参照
- 注19 前田勇氏「母音無声化の原因に就て」(『音声学会会報』八〇号 昭和二十七年二月)
- 注20 糸井寛一氏「大分県長湯方言」(『九州方言の基礎的研究』昭和四四年五月 風間書房)
- 注21 野林正路氏「熊本県深海方言」(『九州方言の基礎的研究』)
- 注22 コリヤード『日本文典』など。宮島達夫氏「母音の無声化はいつからあつたか」(『国語学』四五 昭和三六年)に母音の無声化を記述した外国資料が幾つかあげられており、安田章氏「方言集釋と国語表記」(『朝鮮資料と中世国語』 昭和五五年七月 笠間書院)にも朝鮮資料に存する母音の無声化と思われる例の指摘がある
- 注23 田尻英三氏「18世紀前半の薩隅方言」(昭和五六年 『鹿兒島大学教育学部研究紀要』三二号や迫野虔徳氏「新スラブ・日本語辞典」の「オ」の表記」(『辞書・外国語資料による日本語研究』 和泉書院 平成三年八月)
- 注24 拙稿「外国資料よりみた一八世紀初頭の薩隅方言―助詞の融合について―」(『辞書・外国語資料からみた日本語研究』 和泉書院 平成三年八月)
- 注25 黄国彦氏「日本語の有気音と無気音―中日両語の比較対照の角度から―」(『柴田武教授定年退官記念言語学演習』78 東京大学大学院 柴田ゼミ)による
- 注26 このような文字は他に「山」(『日本語会話入門』において。(s))があるが、これは『日本語会話入門』には用いられていない
- 注27 注4引用の拙稿参照
- 注28 注24引用の拙稿参照
- 注29 注6参照
- 注30 宮島達夫氏「母音の無声化はいつからあつたか」(『国語学』四五 昭和三六年)でも、カ行タ行の有声化より前に母音の無声化が生じたとする。また、ゴンザの資料にみえる「[tadax (e)] (仏)・[tadax (e)] (畑)」などの例は、語中のカ行タ行の有声化の残存とは考え難いように思われる
- 注31 柴田武氏「パロールの言語学」(『月刊言語』八巻五号 昭和五四年五月)に、清濁の対立の在り方の現代方言の分布から、日本語の清濁の史的变化遷を再構築しようとする試みがある
- 〔付記〕
原稿提出後、鹿兒島大学教育学部四年生駒走昭二氏(昭和六三年度入学)より、ゴンザのアクセント表記は、日本語のピッチをあらわしたものでなく、日本語のストレスを表記したものではないか、という案を提示された。ロシア語のアクセントがストレスによるものである以上、日本語のアクセントをそのまま写したのではなく、ストレスを写した可能性は高く、非常に蓋然性の高い考えであると思う。
本稿のアクセントとの関わりにおいて、修正を余儀なくされる部分があるかもしれないが、本人の考察を待ちたく思う。
記して感謝の意を表したい。
- (平成三年十二月三三日)

表 3

	ク	キ	ス	シ	チ	フ	ル	ム	ビ	ブ	グ	ツ
子音 (無声) + 母音	セ、サ、タ、ト、シヤ、ス、チェ、シエ、フイ、ト、シヨ、カ	タ、カ、ツス、	チ、カ、ト、テ、イ、コ、タ、チェ、ツ、ク、	タ、カ、テ、ケ、コ、キ、コ、チェ、ト、	ク、ニ、カ、コ	タ、ト、シヤ、ツ、ト、シヤ、キヤ、シエ、ス、チェ、チ	コ、カ、	カ、サ、タ		タ、シ、サト	タ	カ、ク、ケト
★子音 (有声化) + 母音	(クウウウ食う) (クワゴトネ食おごとない) (クワシエタ食わせた) クウイ (抗) クモ (囊) (クワシ菓子) (クワシ火事) コムラクモ (小むら雲) スクナカ (少なか) ニクマン (憎まん) スグムル (温むる) メク (醜態)	ネ (ak. ne) ヲ (ik. rakas)	コスボイ (こすい) コスナ (小砂) コムスメ (小娘) スナ (砂) スネ (脛) スバ (唇) スマン (済まん) スモ (相撲) スウル (坐る) スゴド (盗人) ムスメ (娘)	イヤシボ (卑し坊) オシガル (欲しがる) オトロシガル (恐ろしがる) シゴト (仕事) シネ (箱) シマ (繭) シマウ (仕舞う) シラス (師走) タシナム (たしなむ)	イチゴ (莓) キチネ (狐) チゴタ (違うた)	コフゲ (小籠) コフネ (小船) フゲ (籠) フタイ (左) フチカタ (舟方) フートル (暇取る)	ケル (車) ツル (豹) ワルムル (丸める)	コムゾ (小樽)			カグメ (かごめ) エ (mag. jur) ユ (ug. jus) ロ (leg. ro)	ツツアル (集まる) ツチ (綱) ツタル (詰まる) ツツマ (替) ツツメ (小爪) ツノ (角) ツチゾ (繁ぐ) ツクイ (作り) ツマツタ (詰まった) ツラモン (強者) ツグムル (集める)
★当該音 + 硬音符号	ク (akók. ro) ヲ (jek. ráw) ロ (fúk. ro) ロ (fúk. ro) ヲ (gok. rak) ロ (kofúk. ro) レ (jek. rent) ヲ (mek. ra) ユ (fúk. jur) リ (xristos)			エ (kof. jur)								キ. (akáck) エ (kac. jur) エ (kenac. jur) イエ (karanc. je) ヨ (c. jokat) ヲ (c. ra)
外国語表記			テ、イ、ク、リ、ス、 チ、イ、テ、ジ、ン、 ト (xristos) コ (ス、コ、ル、ビ、 チ)	キ (シ、キ、リ)		カ (カ、フ、カ、 ス)	ビ (ス、コ、ル、 チ)	チャ (カ、 ム、カ)			レ (ヴェ、ン、 グ、 レ)	キ. (akáck)
子音 +												

表 3 Ⅲ・ 入新スラヴ・ 日本語辞典における無声化する場合の後続音

